

自然教育園の鳥類について

千羽晋示*

A Note on the Avi-fauna of the National Park for Nature Study

Shinji Chiba*

1. これまでの調査の経緯

自然教育園の鳥類についての調査研究や観察記録の報告は、この地が史蹟として古い歴史をもち、自然的要素が温存されていたにもかかわらず、武家の下屋敷、軍の火薬庫、あるいは御料地などといった特異な管理形態をたどってきたため、古いものがほとんど見あたらない。

現在目に留まる数少ない資料も、昭和24年(1949年)文部省に移管されて一般に公開されるようになってからのもので、年代的には新しいものである。

自然教育園の鳥類として、まずまとまった初めての報告は、中西悟堂により1949年5月に発表された1949年3月29日の観察記録であろうと思われる。

この報告は、目黒自然教育園の開園と題して記されたものであるが、同年3月29日の開園式当日の観察鳥類である。

ウグイス・ホオジロ・アオジ・ヒヨドリ・アカハラ・シジュウカラ・トビ・ツグミ・オシドリ・スズメ・カワセミ・カシラダカ・ムクドリ・モズ・コカワラヒワ・コジュケイ・ハシブトガラス・ハシボソガラス・キジバトの19種があげられ、中でもツグミ・アカハラ・ヒヨドリ・シジュウカラが多く、アカハラの囀鳴、ひょうたん池のオシドリが特記されている。

また、カケス・キセキレイ・マヒワ・メジロ・エナガ・コガモ・ノスリなども見られるとされ、この時点で26種が明確になっている(野鳥14巻5号・24頁:1949・5)。

国立自然教育園として発足以来、日本野鳥の会研究部(中西悟堂・鈴木孝夫・蒲谷鶴彦)により鳥類調査がすすめられたが、鳥類に関する本格的な調査は、後で記す高野伸二によるものまで、この時の報告のみのように思われる。

この一応の成果のまとめは、昭和25年(1950年)に、国立自然教育園の野鳥、春夏の鳥の部、および冬鳥の部の2部作として、中西悟堂監修として報告された。

先にでた冬鳥の部では、留鳥としてキセキレイ・シジュウカラ・ホオジロ・メジロ・カワセミなど10種、秋冬の鳥としてカケス・シメ・ジョウビタキ・イカル・ヒガラ・エナガ・キクイタダキ・ノスリなど14種の計24種をとりあげて、各種類ごとに若干の解説を付している。

春夏の鳥の部では、サンコウチョウ・オオヨシキリ・アオバズク・キビタキ・サンショウクイなど13種に解説を加えてあり、終りの部分で、それまでの記録19科、45種について本州を基準にした渡りの類別、自然

* 国立科学博物館付属自然教育園

National Park for Nature Study, National Science Museum

教育園でみられる時期を一覧表で掲出している。

個々の種については目録の項で付記するが1950年の時点でみると、ムクドリ・メジロ・カワセミなどの繁殖することが記されている（国立自然教育園教育資料 冬鳥の部1—16頁；春夏の鳥の部1—9頁・付表2：1950：ガリ版印刷）。

先に中西悟堂（1949）による観察記録を示したが、昭和26年2月3日、中西悟堂、靱山徳太郎・蒲谷鶴彦による野外観察会が実施され、同じくその結果が鶴田総一郎により報告されている。

当日は、シジュウカラ・トビ（30羽）・ホオジロ・コジュケイ・コカワラヒワ（約30羽）・カケス・キジバト・ツグミ・アオジ・コガモ（10数羽）・ムクドリ（5羽）・ヒヨドリ（多し）・ハイタカ（2羽）・ハヤブサ・ウグイス・カシラダカ（10羽くらい）・モズ・ハシボソガラス・シメ・ハシブトガラス・メジロ・アカハラの22種を記録し、ハヤブサとハイタカの2種が鳥類目録に追加された。

この時には、スズメがまったく観察されず珍しい記録としてあげられている（野鳥16巻3号・24～25頁：1951・3）。

自然教育園産鳥類の目録は、開園後5年を経過した昭和29年5月（1954）に発行されたが、そのもととなった黒田長礼監修による A List of Animals in the National Garden for Nature Study, Series 2nd, Aves (Preliminary Report) が昭和28年度（1954・初めか？）にてでている。

これによれば20科、53種があげられているが、ホトトギス・オオコノハズク・ハヤブサの3種は要調査種として指摘されている。

しかし、最初の本格的目録には、このすべてが記載された。

また、この際の検討資料としてトラツグミ・ヤマシギ・ゴイサギ・ミゾゴイ・キジの5種が記入されている（国立自然教育園動物目録 第2集 鳥綱 中間報告・1～4頁：1954？）。

先の資料を基に作成された国立自然教育園の鳥類目録は、22科、55種を記載しているが単に学名と和名のみの記載であり、確認、出典などの記載がないことが惜しまれる。

また、先に検討種とされた5種のうち、本目録に採用されたのは、ゴイサギのみであった（国立自然教育園基礎資料第2号・1～4頁：1954・5）。

本目録発行後、鶴田総一郎により国立自然教育園の紹介が鳥学会誌にされたが、その中に自然教育園に生息する鳥として、種名のみ列記してある（この中で54種とあるは55種の誤りと思う）（鳥13巻、通号64号・72～77頁：1954・9）。

年代が開園時の昭和24年にさかのぼるが、この年の開園に際して出版された国立自然教育園概説の中には、動物相の項の鳥類で、カケス・メジロ・カワセミなど、22種以上の生息が記されている。

しかし、この印刷物の目的が、自然教育園の紹介を主にした全体像を浮彫りにするためのものであるから、リストあるいは鳥類群集の内容的な把握という点では、意味がうすい（国立自然教育園概説・23～24頁：1949・3）。

昭和29年（1954）までの記録などは、自然教育園の鳥類を知るうえで初期的なものにあたり、この後5年間は、これといった報告がみられない。

現在の時点で考えると、自然教育園の鳥類についての調査研究は、昭和29年（1954）までが、自然教育園の開設にともなった第1期とすることができる。

第2期と考えられる昭和35年（1960）まで約5年間の空白があるが、この間は、とくに目立った動きがない。

自然教育園としては、野鳥愛護に関する活動がおこなわれていたが、とくに鳥類相や生態的な調査がなされていなかったということである。

この5年間の特記すべきことは、昭和32年(1957)の中ごろから、自然教育園利用者により、観察種の報告が日本野鳥の会、東京支部報などに載りはじめたことである。

第2期は、昭和35年から昭和40年(1960~1965)である。

高野伸二による年間170日におよぶ調査は自然教育園の鳥類群集の解明に完全なまでの資料を収集したものである。

この調査は、昭和35年4月から昭和36年3月まで実施されたもので、65種が記録されている。

この結果、コイカル・ハクセキレイ・ムギマキ・トラツグミ・ツツドリ・アリスイなどを含む94種がリストに記載されることとなった(自然教育園資料:未発表)。

昭和39年(1964)自然教育園の外囲に高速道路の建設が実施されることとなり、同年9月から翌年8月まで(1964・9~1965・8)千羽により年間129日の調査が実施された。

昭和41年(1966)に鶴田総一郎他で報告されたものは、高野伸二の未報告資料をもとにさらに追加してつくられた鳥類目録で32科96種を記載している。

さらに、確認記録、主な生息域、季節変動などを示し、年間の生息表、分布図を記している(自然教育園の生物群集に関する調査報告 第1集・79~93頁:1966)。

昭和44年(1969)に先の報告のもととなった資料を、出現頻度、鳥相内優占度などから比較、検討した結果を千羽は、報告している。

そこでは、東京都内に残存している20ヘクタールという狭い自然林としては、比較的豊富な鳥相を示しており、その存在価値を知らせると共に、一方では、スズメやハシブトガラスといった人間の居住地と結びつく種類が増加し、自然教育園内外の環境がいちぢるしく変化していることを示唆している。

さらに、高速道路の建設が自然教育園の鳥類群集に、どのような影響をおよぼすのかを憂慮している(自然教育園報告 第1号・1~13頁:1969)。

昭和41年からは昭和39年の高速道路の建設、開通、そして付帯する工事が昭和42年まで続いたという混乱期をはさんで、第3期にはいるものと考ええる。

昭和45年後(1970年代)には、いろいろな角度から自然教育園の鳥類に関する検討がなされ、報告されているが、この間も若干の資料収集は続けられた。

昭和47年(1972)に発表された桜井他によるシジュウカラの繁殖個体数の変動の考察は、先の高速道路も含め、周辺環境との関連をのべている。

すなわち、昭和36年に36番いたものが、昭和46年には、22番に減少し、その要因を道路の完成、高層ビル化など周辺地域の変化によるものとしている(自然教育園報告 第3号・17~21頁:1972・3)。

また千羽は、岡安他の昭和41年(1966)の未発表資料を参考にして、自然教育園の鳥類が、カラス・オナガ・スズメ・キジバトなど数種の特徴ある性格をもったもので占有されつつあり、種類相の単純化がおこりつつあるらしいことを報告した(都市生態系の特性・83~96頁・33~37頁:1972・3)。

ついで桜井は、昭和48年に東京都内のシジュウカラの生息状況と森林植生との相関を示し、自然教育園のように森林が島状に残存している地域では、周年生息していることを考察した(都市生態系の特性・123~137頁:1973・3)。

昭和49年(1974)に千羽は、単純化傾向を知るための資料を示し、オナガ・キジバトの留鳥化、カワセミヤマガラ・アカゲラなど漂鳥性の鳥の減少、カケス・ノスリなど冬鳥の減少、イソシギ、オオルリなど旅鳥の減少を考察した。

さらに、スズメ・ハシブトガラス・ムクドリ・オナガ・キジバト・シジュウカラ・ヒヨドリの7種について出現頻度・鳥相内優占度を検討し、増減傾向、そして、今後の予測などを示した(都市生態系の特性・27

～46頁：1974・3）。

昭和39年（1964）以降の自然教育園の鳥類に関しては、いちぢるしい変動を示した時期といえる。

しかし、昭和46年（1971）より開始された都市生態系の特性に関する基礎的研究（1971～1973）、つづいての都市生態系の構造と動態に関する研究（1974～1976：いずれも文部省特定研究・研究代表者 沼田真）の一連の調査研究の対象地域となったことから、資料の収集は順調に進み、高野が収集、集大成して以来、改めてこの報告を記すまでに至った。

2. 自然教育園産鳥類目録

昭和41年（1966）に発表した鶴田他による目録があるが、その後10年を経過しており、新しく追加する記録もあるため、追補し記すこととした。

本目録中の記録の記載は、稀種については知り得たすべてを記したが、調査もれもあるかと思う。その点にご教示をたまわりたい。

普通種については、一部省略したものもある。

目録での配列、学名、和名は、日本鳥類目録 第5版（編纂 日本鳥学会：1974）によった。

コウノトリ目

CICONIIFORMES

サギ科

ARDEIDAE

1. ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis sinensis* (Gmelin)
14・Ⅸ・1969（水生）
移動の途中に立ちよったものと思われ、例年飛来するものではない。
2. ゴイサギ *Nycticorax nycticorax nycticorax* (Linnaeus)
例年Ⅳ～Ⅸ（ひょうたん池・水生）
多くは夜間に飛来し、早朝飛去する。稀にⅡの例（1974）あり。
ホシゴイといわれる幼鳥が多く、ときに数日間残留するものもある。
3. ササゴイ *Butorides striatus amurensis* (Schrenck)
2・Ⅸ・1964（ひょうたん池）
1回の記録のみ。
4. ダイサギ *Egretta alba* (Linnaeus)
31・Ⅹ；24・8・ⅩⅢ・1974（水生）
5. チュウサギ *E. intermedia intermedia* (Wagler)
15・ⅩⅢ・1965；6・Ⅲ・1973；24・ⅩⅠ・1974など（水生）
6. コサギ *E. garzetta garzetta* (Linnaeus)
9・Ⅸ・1964（♀）；1972までは稀に飛来；Ⅱ～Ⅳ・Ⅸ・ⅩⅠ・1973；Ⅰ～Ⅵ・Ⅷ～ⅩⅡ・1974と、だいに頻ぱんに飛来するようになった。
一般にシラサギと称されるこの類は、1972年までは、飛来も稀であった。
しかし、1973年頃からは1～2羽でたびたび飛来するようになる、コサギでは、2羽で1か月も滞留するようになった。
コサギは、ひょうたん池・水生・いもりの池・水鳥の沼と広く水域を利用するが、ダイサギ・チュウサギは、水生でみる。

7. アオサギ *Ardea cinerea jouyi Clark*
 8・21・31・Ⅲ・1961(高野); 12・Ⅹ・1968(市川)
 稀に飛来。

ガンカモ目

ANSERIFORMES

ガンカモ科

ANATIDAE

8. オシドリ *Aix galericulata (Linnaeus)*
 例年Ⅸ～翌年Ⅴ。もっとも早い初認は、21・Ⅷ・1970。終認は29・Ⅴ・1974。
 飛来数の最高は158羽(120♂・38♀; 27・Ⅺ・1964)。
 最近は年々減少しつつある(8♀・8♂; 22・Ⅲ・1976)。
9. マガモ *Anas platyrhynchos platyrhynchos Linnaeus*
 10・Ⅹ・1963; Ⅹ～Ⅲ・1964; 14～20・Ⅱ・1965; 8・Ⅱ・1970; Ⅱ～Ⅳ・Ⅺ・1974; Ⅲ～Ⅳ・1975
 など(ひょうたん池・水生)。
 1975年頃までは、たびたび水生、ひょうたん池などに飛来したが、その後やや稀となる。
10. カルガモ *A. poecilorhyncha zonorhyncha Swinhoe*
 21・Ⅷ・1970など。Ⅷ・Ⅹを除く各月・1974(2～5羽)。
 1970年頃までは飛来も稀、滞留日数も短い。
 1973年頃からはしばしばひょうたん池・いもりの池などに2～5羽で飛来するようになり、滞留日数も長期となる。
11. コガモ *A. crecca crecca Linnaeus*
 例年Ⅸ～翌年Ⅴ。オシドリとともにひょうたん池・水生・いもりの池に滞留、越冬する。
 もっとも早い初認は21・Ⅷ・1970で、終認は16・Ⅴ・1964。
 飛来数の最高は104羽(15・Ⅰ・1970)がある。現在は減少しつつある(6羽; 22・Ⅲ・1976)。
12. トモエガモ *A. formosa Georgi*
 極めて稀: 6・Ⅺ・1960(♀1羽; 高野)

ワシタカ目

FALCONIFORMES

ワシタカ科

ACCIPITRIDAE

13. トビ *Milvus migrans lineatus (J. E. Gray)*
 3・Ⅺ・1951(鶴田); 15・Ⅲ・1961(398羽; 高野); 21・Ⅲ・1963(170羽)など。
 Ⅲから翌年Ⅱまでねぐらとしてつかう。最近は50羽くらいになる。
14. オオタカ *Accipiter gentilis fujiyamae (Swann & Hartert)*
 25・27・Ⅹ・1960(幼1羽; 高野)
 稀に上空通過するのを見る。
15. ハイタカ *A. nisus nisosimilis (Tickell)*
 3・Ⅺ・1951(鶴田); 4・29・Ⅳ(高野)
 稀に上空通過する。
16. ノスリ *Buteo buteo japonicus (Temminck & Schlegel)*
 5・Ⅹ・1961(初認; 高野); 10・Ⅺ・1965(水生)など。
 1970年頃までは例年Ⅹ下～翌年Ⅲ上まで水生から湿地にかけて林縁にとどまり採餌していたが、以

後姿を消す。稀に飛来することあり。

17. サシバ *Butastur indicus* (Gmelin)
21・Ⅴ・1961 (高野); 27・Ⅳ: 7・Ⅸ・1974 (上空通過) など。

ハヤブサ科 **FALCONIDAE**

18. ハヤブサ *Falco peregrinus japonensis* Gmelin
3・Ⅱ・1951 (鶴田); 7・Ⅲ・1・Ⅳ・1961 (高野); 4・Ⅱ・1961 (柳沢); 14・Ⅷ・1974 など。
上空通過のみ。Ⅷの記録としては27・Ⅷ・1969 (吹上御苑) が都内である。
19. チョウゲンボウ *F. tinnunculus interstinctus* Horsfield
28・Ⅹ・1960; 9・Ⅳ, 14・Ⅹ・1961 (高野)

キジ目 **GALLIFORMES**

キジ科 **PHASIANIDAE**

20. コジュケイ *Bambusicola thoracica thoracica* (Temminck)
蕃殖: 国内全域に生息。近年減りつつある。
21. コウライキジ *Phasianus colchicus karpowi* Buturlin
7・Ⅰ・1971 (♀1羽: 教研跡)
近くの飼育していたものが侵入したものと考えられる。
22. トウカイキジ *P. c. tohhaidi momiyama*
1962の記録あり。また、1953のリストの中に追加してある。

クイナ科 **RALLIDAE**

23. パン *Gallinula chloropus indica* Blyth
1・Ⅹ・1964 (都内四ツ谷3丁目で捕獲した幼鳥1羽を放鳥)
その後みていない。

チドリ目 **CHARADRIIFORMES**

シギ科 **SCOLOPACIDAE**

24. イソシギ *Tringa hypoleucos* Linnaeus
9・Ⅷ・1960 (高野); 3・Ⅸ・1965; 14・Ⅳ・1973 (水鳥の沼)
高速道路で池に人手が加わる前は、たびたび飛来していたが、現在は稀。
25. ヤマシギ *Scolopax rusticola* Linnaeus
17・Ⅲ・1958; 17・Ⅳ・10・Ⅹ・1960 (高野); 5・Ⅳ・1963; 26・Ⅸ・1964; 18・Ⅳ・1974。
武蔵野・湿地などでみる。
26. タシギ *Gallinago gallinago gallinago* (Linnaeus)
20・Ⅳ・1974 (湿地)

カモメ科 **LARIDAE**

27. コアジサシ *Sterna albifrons ssinensis* Gmelin
27・Ⅸ・1964 (上空通過)

ハ ト 目 COLUMBIFORMES

ハ ト 科 COLUMBIDAE

28. キジバト *Streptopelia orientalis orientalis* (Latham)

蕃殖：11・Ⅺ・1964（40羽・森の小道）

近年蕃殖数も多くなっており、個体数も増加している。

ホトトギス目 CUCULIFORMES

ホトトギス科 CUCULIDAE

29. カッコウ *Cuculus canorus telephonus* Heine

27・Ⅸ・1964；23・Ⅴ・1974；

初夏の飛来は1例のみ。

30. ツツドリ *C. saturatus horsfieldi* Moore

17・Ⅹ・1964；26・Ⅳ・1960（高野）；21・Ⅸ・1965；26～28・Ⅸ・1965

31. ホトトギス *C. poliocephalus poliocephalus* Latham

25・Ⅴ・1961（高野）；23・Ⅴ・1951（鶴田）；30・Ⅴ・1970；23・Ⅶ・1971（松岡）；1・Ⅵ・1973；24・Ⅴ・1974

ホトトギスの例がもっとも多い。春秋の渡りの際に飛来する。

フクロウ目 STRIGIFORMES

フクロウ科 STRIGIDAE

32. コミミズク *Asio flammeus flammeus* (Pontoppidan)

15・1・1969（教研跡で死体）。

33. オオコノハズク *Otus bakkamoena semitorques* Temminck & Schlegel

11・Ⅺ・1970

シイの枯枝にとまるのをみる。冬期に時々この種らしい黒影を枯枝上にみる。

34. アオバズク *Ninox scutulata japonica* (Temminck & Schlegel)

3・Ⅶ, 13・Ⅸ, 8・Ⅹ・1960（高野）；30・Ⅴ～13・Ⅹ・1963；3・Ⅸ・1965；27・Ⅴ・1973；29・Ⅴ・1975

例年Ⅴ～Ⅹまで飛来しているが2羽のみ。1974年頃より夜間鳴き声がかかれなくなった。

ヨ タ カ 目 CAPRIMULGIFORMES

ヨ タ カ 科 CAPRIMULGIDAE

35. ヨタカ *Caprimulgus indicus jotaka* Temminck & Schlegel

1・Ⅺ・1961（高野）

アマツバメ目 APODIFORMES

アマツバメ科 APODIDAE

36. アマツバメ *Apus pacificus kurodae* (Domaniewski)

15・Ⅹ・1960（2羽）；6・Ⅹ・1961（50羽±）（高野）

上空通過のみ。

ブッポウソウ目 CORACIIFORMES

カワセミ科 ALCEDINIDAE

37. カワセミ *Alcedo atthis bengalensis Gmelin*

39・Ⅲ・1949（中西）；4・Ⅳ・1959（柳沢）；17・Ⅲ・1958（2羽以上・高野）

1961年頃まではⅢ～Ⅺまでよく活動しているのが認められているが、1964年の時点ではまったくみられなくなった。

キツツキ目 PICIFORMES

キツツキ科 PICIDAE

38. アリスイ *Jynx torquilla japonica Bonaparte*

20・Ⅹ・1960（水生：高野）

39. アオゲラ *Picus awokera awokera Temminck*

14・16・Ⅳ・1960（♀・高野）；17・27・Ⅹ・1964

アカゲラより稀。

40. アカゲラ *Dendrocopos major hondoensis (Kuroda)*

Ⅳ・Ⅶ・Ⅸ～Ⅻ・1960；Ⅰ～Ⅲ・1961（高野）；15・Ⅹ・1964；18・Ⅺ・1966；20・Ⅻ・1966（本多）；9・Ⅻ・1972；

稀に飛来する。

ヒバリ科 ALAUDIDAE

41. ヒバリ *Alauda arvensis japonica Temminck & Schlegel*

17・Ⅲ・1958；25～26・Ⅹ・1961（高野）

スズメ目 PASSERIFORMES

ツバメ科 HIRUNDIDAE

42. ツバメ *Hirundo rustica gutturalis Scopoli*

例年Ⅳ～Ⅹ。25・Ⅳ～7・Ⅹ・1964など。

1965年には15・Ⅹ（2羽）とおそくまでみられている。

セキレイ科 MOTACILLIDAE

43. キセキレイ *Motacilla cinerea rabusta (Brehm)*

30・Ⅹ，14・Ⅹ，1972；30・Ⅹ，14・19・Ⅹ，4・Ⅺ，1973；4・Ⅳ，6・31・Ⅹ，17・24・Ⅺ，1974など記録多し。

Ⅱ・Ⅲを除き各月に不規則にみる。

44. ハクセキレイ *M. alba lugens Gloger*

13・Ⅹ・1960（2羽）；25・Ⅹ・1961（高野）

45. セグロセキレイ *M. grandis Sharpe*

25・Ⅺ・1964；19・Ⅹ・1973；21～22・Ⅱ，23・Ⅴ・1974など。

46. ビンズイ *Anthus hodgsoni hodgsoni Richmond*

15・Ⅹ（3羽）；26・28・Ⅹ・1960（高野）；25・Ⅹ・1961（高野）；18・Ⅳ・1974（1羽）

このなかまは1975年頃からは、キセキレイのみがみられている。春秋の移動時に数日滞留する程度で蕃殖の記録がない。

サンショウクイ科 CAMPEPHAGIDAE

47. サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus divaricatus* (Raffles)
29・Ⅳ, 17・Ⅷ・1960 (高野); 2・Ⅴ・1963; 22~23・Ⅳ・1969 (柳沢)

ヒヨドリ科 PYCNONOTIDAE

48. ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis amaurotis* (Temminck)
22・Ⅺ・1963 (43羽); 21・Ⅹ・1964 (18羽) など。
1970年ころまでは、Ⅹ~翌年Ⅴまで滞留する冬鳥であったが、以後定着するようになり1974年以後は、周年生息している。繁殖はしていない。

モズ科 LANIIDAE

49. モズ *Lanius bucephalus bucephalus* Temminck & Schlegel
31・Ⅲ・1962 (繁殖・1巢3卵:高野); 14・Ⅹ・1963 (3羽); 15・Ⅵ・1969; 15・Ⅰ・1979; 21・Ⅲ・1973 (1巢2卵・アオキ)
1973年は1月・8月を除く全月に観察。1974年には3~8月に未観察。例年7~8月ころ一時的に姿を消す。
50. アカモズ *L. cristatus superciliosus* Latham
4・21・Ⅴ・1960 (♀♂・高野); 6~8・Ⅹ・1964

レンジャク科 BOMBYCILLIDAE

51. キレンジャク *Bombycilla garrulus centralasiae* Poliakov
6・15・17・Ⅲ・1958 (8~12羽・高野)

ミソサザイ科 TROGLODYTIDAE

52. ミソサザイ *Troglodytes troglodytes fumigatus* Temminck
8~11・Ⅵ・1960 (高野)

ヒタキ科 MUSCICAPIDAE

ツグミ亜科 TURDINAE

53. ノゴマ *Erithacus calliope* (Pallas)
15・Ⅹ・1970 (食草園・2羽)
この日1日のみ滞留。
54. ルリビタキ *Tarsiker cyanurus cyanurus* (Pallas)
14・Ⅳ; 9・ⅩⅢ・1960 (高野); 20・Ⅰ・1974; 2・Ⅲ・1975; 26・Ⅲ・1975 (本多)
目立たない鳥であるため記録は少ないが例年飛来しているのかも知れない。
55. ジョウビタキ *Phoenicurus auroreus auroreus* (Pallas)
11・ⅩⅢ・1970; 7・Ⅰ・1971; 28・Ⅹ・1972; 26・Ⅹ・1973; 10・Ⅹ・1974など。

例年10月頃飛来する。

56. ノビタキ *Saxicola torquata stejnegeri* (Parrot)
18・X・1961 (舎：高野)；3・IX・1964 (舎・シイ並木)；22・X・1964 (三叉路)
57. トラツグミ *Turdus dauma aureus* Holandre
9・15・II・1961 (高野)
58. クロツグミ *T. cardis* Temminck
29・X・1961 (舎・♀：高野)；16・V・1965 (鈴木)；27・IV：5・V・1973
55. アカハラ *T. chrysolais* Temminck
27・IV・1957 (東京支部報32)；21・XIII・1972；5～IV～5・V・1973；2～16・XIII・1973；17・I
～5・V・1974；10・XI・1974～2・III・1975
1965年当時からみると飛来の時期がややおそくなる傾向がみられている。
60. シロハラ *T. pallidus* Gmelin
11・XIII・1966；2・XIII・1972～19・IV・1973；9・XIII・1973～13・IV・1974；20・XI・1974～19・I
I・1975
11月頃飛来し，翌年4月頃飛去する。数は少ない。
61. マミチャジナイ *T. obscurus* Gmelin
12・X (3羽)；20・X (2羽)；21～22・X (1羽)；25・X (3羽)；28・X・1960 (2羽・高野)；23・IX；25・X・1974 (佐伯)
62. ツグミ *T. naumanni eunomus* Temminck
XI・1965～IV・1966；8・II・1970 (25+羽)；11・XI・1972～5・V・1973；4・XI・1973～5・V・1974；6・X・1974～13・V・1975
例年11月初旬頃飛来し，翌年5月まで滞留。
ツグミ亜科中数は最も多い。

ウグイス亜科

SYLVIINAE

63. ウグイス *Cettia diphone cantans* (Temminck & Schlegel)
XIII・1965～IV・1966；11・XIII・1966 (7羽)；6・VII・1969；9・XI・1969～12・IV・1970；28・X
・1972～2・V・1973；4・XI・1973～23・V・1974；20・XI・1974～27・IV・1975
初囀：4・IV・1963；8・III・1966
64. コヨシキリ *Acrocephalus bistrigiceps* Swinhoe
21・V・1960 (高野)；27・V・1961 (高野)
65. オオヨシキリ *Acrocephalus arundinaceus orientalis* (Temminck & Schlegel)
4～5・V，12～14・V・1963；28・IX・1965；14・V・1967 (本多)；4・V・1973；24・V・1974など。
1～2日でいなくなる。
66. メボソムシクイ *Phylloscopus borealis* (Blasius)
30・V～3・VI・1973；23・V・1974；1・VI・1961 (高野)；30・V・1971など。
1975年は飛来していない。
67. エゾムシクイ *P. tenellipes* Swinhoe
13・V；22・25・X・1960 (高野)；2・V・1961 (高野)；29・IV・1969；4・V・1973；1・V

・1974；13・Ⅴ・1975

高野の2羽の記録を除いて、すべて単独。

68. センダイムシクイ *P. occipitalis coronatus* (Temminck & Schlegel)

8・Ⅴ・1960(3羽；高野)；25~26・Ⅳ；2~4・Ⅴ・1963(高野)；Ⅳ・1966；14・Ⅳ；4~5
・Ⅴ・1973(1~2羽)；18~27・Ⅳ；1~5・Ⅴ・1974

例年4~5月頃に飛来。

69. キクイタダキ *Regulus regulus japonensis* Blakiston

25・Ⅲ・1967(本多)；26・Ⅲ・1971(T字路マツ)

ヒタキ亜科

MUSCICAPINAE

70. キビタキ *Ficedula narcissina narcissina* (Temminck)

22・Ⅸ~22・Ⅹ・1964；24・Ⅸ・1965(2羽)；19・Ⅸ・1964(2♀型；宇山)；9・Ⅹ・1966；23
・Ⅳ・1973；19・Ⅹ・1973；13・Ⅴ・1975

例年春秋に飛来するが秋の方が定期的。近年少なくなっている。

71. ムギマキ *F. mugimaki* (Temminck)

10・Ⅹ・1960(♂幼；高野)

72. オオルリ *Cyanoptila cyanomelana cyanomelana* (Temminck)

27・Ⅳ・1960；31・Ⅷ・1961(♂・カゴ抜け？；高野)；8・Ⅸ・1965(♂・シイ並木)；3・Ⅷ・
1961(小原)；23・Ⅳ・1973(♂)；20・Ⅳ；3~4・Ⅴ；10・20・Ⅹ・1974

1年に1回、突然出現することあり。よく囀る。

73. エゾビタキ *Muscicapa griseisticta* (Swinhoe)

12・Ⅹ(2羽)；8・Ⅹ(4羽)；1960(高野)；26・Ⅸ・1964(2羽・武蔵野)；29・Ⅸ・1965(5
+羽・正門脇)；19・Ⅸ・1964(宇山)；15・Ⅸ・1966；1・Ⅹ・1965(2羽)；7・Ⅹ・1972；10・
Ⅹ・1974；

例年9~10月の飛来が多い。

74. コサメビタキ *M. latirostris* Raffles

15・Ⅴ・1963；27・Ⅸ；1・Ⅹ(4羽)；19・Ⅸ(3羽；宇山)；1964；26~29・Ⅸ・1965(2羽)；
15・Ⅸ・1966；14・Ⅸ・1969など。

カササギヒタキ亜科

MONARCHINAE

75. サンコウチョウ *Terpsiphone atrocaudata atrocaudata* (Eyton)

Ⅴ~Ⅹ・1960~1961(1~2羽；高野)；10・21・Ⅸ・1965(1~2羽)；16・Ⅴ(♂；鈴木)；26・
Ⅸ・1965；11・Ⅸ・1966(2羽)；24・Ⅴ；20・Ⅸ・1973など。

5月、9月の記録が多い。

エナガ科

AEGITHALIDAE

76. エナガ *Aegithalos caudatus trivirgatus* (Temminck & Schlegel)

12・Ⅺ・1963(鈴木)；

シジュウカラ科

PARIDAE

77. コガラ *Parus montanus restrictus Hellmayr*
4・Ⅳ・1959 (東京支部報53)
78. ヒガラ *P. ater insularis Hellmayr*
20・Ⅶ・4・Ⅷ・1960 (高野)
79. ヤマガラ *P. varius varius Temminck & Schlegel*
6・Ⅵ・16・Ⅶ・1960; 10・Ⅰ・1961 (43羽:高野); 19・Ⅹ・1962~14・Ⅴ・1963; Ⅻ・1965; 21・Ⅺ・1965~16・Ⅲ・1966; Ⅱ・Ⅸ・1966 (3羽); 28・Ⅰ・1968 (本多); 7~12・Ⅵ・1974など。
多くは単独で時折り飛来する。
80. シジューカラ *P. major minor Temminck & Schlegel*
19・Ⅺ (45羽); 4・Ⅻ (51羽); 1960 (高野); Ⅹ~Ⅻ (17~28羽); 1964など。
カラ類中唯一の繁殖種。

メジロ科

ZOSTEROPIDAE

81. メジロ *Zosterops japonica japonica Temminck & Schlegel*
22・Ⅹ・1960 (20羽:高野); 10・Ⅳ (18羽); 26・Ⅹ・1961 (62羽:高野); 13・Ⅳ・1963; 30・Ⅳ・1965 (10~12羽の2群); 9・Ⅺ・1969; 15・Ⅰ; 12・Ⅳ・1970; 23・Ⅸ; 7・28・Ⅹ; 22・Ⅻ・1972 (2~4羽); 13・Ⅰ~4・Ⅱ (2~5羽); 19・Ⅹ (9羽); 4・Ⅺ (9羽); 9~20・Ⅻ (4~5羽); 1973; Ⅰ~Ⅻ・1974 (1~6羽); Ⅰ~Ⅲ・1975 (1~4羽) など。
記録は多いが、時々飛来するのみで、繁殖はしない。

ホオジロ科

EMBERIZIDAE

82. ホオジロ *Emberiza cioides ciopsis Bonaparte*
19~25・Ⅰ・1975 (3羽) など。
最高数は3羽。繁殖つがいは1で、巢の確認も1。武蔵野で営巣することが多い。
83. カシラダカ *E. rustica latifascia Portenko*
29・Ⅲ・1949 (中西); 22・Ⅹ・1960 (高野); 12・Ⅲ; 26・Ⅹ・1961 (2羽:高野); 29・Ⅲ・1963 (5羽); 16・Ⅺ・1964; 22・Ⅰ・1970; 18~20・Ⅲ; 4・22・Ⅳ; 28・Ⅹ; 22・Ⅺ (1~2羽); 1973; 8・Ⅻ・1974 (4羽); 12・19・Ⅰ・1975など。
84. アオジ *E. spodocephala personata Temmiuck*
Ⅹ~翌年Ⅳ・例年; Ⅹ・1963~Ⅳ・1964 (5~20羽); Ⅺ・1965~Ⅳ・1966; 9・Ⅲ・1969 (10羽:本多); 8・11・1970 (8羽); 7・Ⅹ・1972~6・Ⅴ・1973 (13羽—14・Ⅳ・1973が最高); 14・Ⅹ・1973~5・Ⅴ・1974 (13羽—9・Ⅻ・1973); 31・Ⅹ・1974~27・Ⅳ・1975 (9羽—15・Ⅳ・1975) など。
例年飛来するが5~9羽をみることが多い。
85. クロジ *E. variabilis Temminck*
中旬・Ⅳ~月上旬・Ⅴ・1960~1961 (高野); 26・Ⅳ・1963 (西マツ林・4羽); 4・Ⅺ・1973

アトリ科

FRINGILLIDAE

86. カワラヒワ *Carduelis sinica (Linnaeus)*
2~14・Ⅴ・1963 (5~10羽); 6・Ⅺ・1966 (2羽); 15・Ⅵ・1969; 7・Ⅹ; 17・Ⅻ; 1972; 12・

Ⅱ；21・Ⅲ（2羽）；23・Ⅳ（3羽）；27・Ⅴ（4羽）；1・Ⅵ（4羽）・1973；2・Ⅱ（2羽）；10・Ⅳ（7羽）；24・Ⅲ（2羽）・1974；20・Ⅴ・1975（4羽）など。

例年各月に頻度高くみられる。1～4羽くらいが多い。

87. マヒワ *C. spinus* (Linnaeus)

11・Ⅳ（10羽）；31・Ⅲ・1961；4・Ⅰ・1962（高野）；

88. ウソ *Pyrrhula pyrrhula griseiventris* Lafresnaye

9～12・Ⅺ・1960（♀：高野）；23・Ⅲ・1969（♂：山口）；25・Ⅲ・1973（1羽）

89. コイカル *Eophona migratoria migratoria* Hartert

10・Ⅹ・1960（♀：高野）

90. イカル *E. personata personata* (Temminck & Schlegel)

18・Ⅷ・1961（高野）；7・Ⅺ・1965（1羽）；26・Ⅳ・1973（1羽）

91. シメ *Coccothraustes coccothraustes japonicus* Temminck & Schlegel

7・Ⅰ・1961（8羽：高野）；17・Ⅲ・1958（8羽：高野）；14・Ⅻ・1963～13・Ⅱ・1964（1～2羽）；20・Ⅺ・1964～17・Ⅱ・1965（3～5羽）；Ⅺ・1965～Ⅱ・1966（2～6羽）；11・Ⅻ・1966（4羽）；18・Ⅺ・1972～27・Ⅳ・1973（最高6羽）；18・Ⅺ・1973～4・Ⅳ・1974（最高4羽）；17・Ⅺ・1974～22・Ⅳ・1975（最高7羽）など。

例年飛来するが、5羽前後をみることが多い。

ハタオドリ科

PLOCEIDAE

92. スズメ *Passer montanus saturatus* Stejneger

周年採餌に飛来する。園内での繁殖記録なし。

ムクドリ科

STURNIDAE

93. コムクドリ *Sturnus philippensis* (Forster)

15・Ⅹ・1960（9羽：高野）；30・Ⅹ・1963（6羽）；29・Ⅹ・1964；19・Ⅹ・1964（40羽：宇山）；19・Ⅹ・1965（30羽）；18・Ⅹ・1974（10羽）；23・30・Ⅹ・1973（3羽）

94. ムクドリ *S. cineraceus* Temminck

19・Ⅷ（280～300羽・ひよたん池上）；19・Ⅻ（700羽・森の小道）；1963；Ⅵ・1965～Ⅴ・1966（Ⅻ・Ⅳを除く）；11・Ⅹ・1966（74羽）；15・Ⅷ・1969（84羽）；23・Ⅹ・1972（80羽）；8・Ⅶ（168羽）；26・Ⅶ（154羽）；9・Ⅷ（203羽）・1973；4・Ⅹ・1974（50羽）；20・Ⅴ・1975（15羽）など。

1973羽頃より急に群の飛来が減少する。夏季の終りに大群が飛来する。

カラス科

CORVIDAE

95. カケス *Garrulus glandarius japonicus* Temminck & Schlegel

15・Ⅹ・1963（7羽：湿地）；1・Ⅹ・1965；30・Ⅹ；6・Ⅺ（各4羽）；1966；15・Ⅰ・1970；Ⅹ・1965～Ⅳ・1966；1・Ⅹ・1974～27・Ⅳ・1975（最高数5羽：20・Ⅹ・1974）

1970年代にはいりみられなくなり、1974年冬に飛来、1975年以降は、また稀となる。

96. オナガ *Cyanopica cyana japonica* Parrot

22・Ⅺ・1963（35羽・湿地）；12・Ⅰ・1965（17羽）；31・Ⅷ・1966（8羽）；26・Ⅹ・1969（8羽）；17・Ⅻ・1972（12羽）；18・Ⅲ・1973（17羽）；7・Ⅱ・1974（24羽）；20・Ⅴ・1975（5羽）など。

1972年頃より毎日飛来するようになってきている。

97. ハシボソガラス *Corvus corone orientalis Eversmann*

1963~1964 (3~4羽); 28・Ⅺ・1975 (本多); Ⅹ・1972~Ⅳ・1973 (1~2羽); 1973以後も同傾向を示す。

不規則に飛来。

98. ハシブトガラス *C. macrorhynchos japonensis Bonaparte*

周年生息, 若鳥が多く繁殖個体は少ない。

Ⅷ・1963 (180~200羽); Ⅺ・1964 (250羽); Ⅺ・1974 (500羽以上)

年々増加の傾向がある。

飼い鳥の記録

ホウオウジャク *Steganura payadisea*

24・Ⅱ・1968

ヘキチョウ *Lonchura waja*

19・Ⅵ・1968

セキセイインコ *Melopsittacus undulatus (Shaw)*

年に何回かみられる。

カササギ *Pica pica (Linnaeus)*

6・Ⅴ・1975

ベニスズメ *Amandava Spoyaeginthus amandava*

5・Ⅹ・1976 (頼)

カワラバト (ドバト) *Columba livia*

冬季多い

このたびの目録には, 13目, 33科, 98種及亜種と, 自然教育園内で観察された飼い鳥など6種を収録した。

先の1966年の目録では, 32科, 96種及亜種を記し, 過去の仮目録などに記載されていたものをそのまま収録していたが, とくに確認年月日などの記載のないものは, 今回目録から除外した。

オナガガモ *Anas acuta acuta Linnaeus*

コチョウゲンボウ *Falco columbajus insignis (Clark)*

クイナ *Rallus aquaticus indicus Blyth*

ヒクイナ *Porzana fusca erythrothorax (Temminch & Schlegel)*

これらは, いずれも確認記録の記載のないまま, 未発表仮目録に記入されていたものであるため, 今回は, 参考記録として示しておく。

3. 鳥類群集のこれまでの変動と考察

自然教育園の鳥類群集の全体像の概要は, 調査経緯の項で記しておいたが, 公開施設として発足以来, やがて30年を迎えようとしている今日, 1975年現在までの変動などに関して科ごとにとらえ, 考察してみたい。

(1) サギ科 (ARDEIDAE) 7種

サギ科7種中、現在も自然教育園に飛来するものは、ゴイサギとコサギの2種である。

いずれも繁殖はみられないが、夜間にゴイサギが、昼間にコサギが採餌のために飛来するもので、その数は多くはない。

ゴイサギは、当初からしばしばひょうたん池の奥などに残留するのがみられ、とくにホシゴイと称される幼鳥が残る率が高い。

コサギの飛来は1973年ころから頻度が高くなり、同時にダイサギやチュウサギの飛来もみられつつある。

ゴイサギは5～9月(1973)、2・5～8・10～11月(1974)・4月(1975)などの記録があり、夏季に飛来率の高いことがわかる。

コサギは、12月(1972)、2～4、9・11月(1973)、1～6、8～12月(1974)、1～3月(1975)という形で飛来し、出現の頻度も1974年ころには、センサス回数の50%をこえるようになり、とくに8～9月(1974)では80%以上を示している。

ゴイサギ、ササゴイ、ヨシゴイはひょうたん池奥のうす暗い地域で観察されており、シラサギ類、アオサギは、ひょうたん池奥から湿地、イモリの池、水鳥の沼にかけての低湿地沿いに行動している。

採餌物はアメリカザリガニが主と考えられザリガニの制御に大きな働きをしているものと推察される。

(2) ガンカモ科 (ANATIDAE) 5種

例年自然教育園を越冬地としているのは、オシドリ、コガモの2種である。

オシドリは、1964年の158羽を最高にしたいに減少しており、コガモは1961年の70羽以上を最高に減少している。

オシドリ、コガモの個体数については、1965年までの変化を前報に示したが(1969)、1969年から1970年の月変化はオシドリで14・Ⅸ(1)、26・Ⅹ(9)、9・Ⅺ(含15・♀4)、14・Ⅻ(含10・♀4)、15・Ⅰ(含15・♀4)、8・Ⅱ(含7・♀1)、12・Ⅲ(含3・♀3)、1972年から1973年は30・Ⅳ(2)、21・Ⅴ(19)、25・Ⅵ(9)、17・Ⅶ(22)、20・Ⅷ(12)、11・Ⅷ(17)、20・Ⅸ(12)、6・Ⅹ(6)、10・Ⅹ(4)、1973年から1974年は、20・Ⅹ(2)、30・Ⅺ(6)、28・Ⅺ(18)、11・Ⅻ(27)、9・Ⅻ(25)、12・Ⅰ(19)、24・Ⅱ(15)、10・Ⅲ(32)、3・Ⅳ(20)、29・Ⅴ(1)、1974年から1975年は6・Ⅹ(2)、29・Ⅺ(9)、20・Ⅺ(17)、10・Ⅻ(20)、24・Ⅻ(21)、8・Ⅰ(20)、2・Ⅱ(22)、16・Ⅲ(25)、8・Ⅳ(13)となっている。

一方コガモの変動は、1969年から1970年に26・Ⅹ(27)、9・Ⅺ(21)、14・Ⅻ(47)、15・Ⅰ(104)、8・Ⅱ(71)、12・Ⅲ(47)、10・Ⅳ(19)、1972年から1973年では23・Ⅳ(1)、28・Ⅴ(30)、25・Ⅵ(51)、23・Ⅶ(82)、20・Ⅷ(56)、4・Ⅷ(57)、20・Ⅸ(43)、5・Ⅹ(39)、2・Ⅺ(13)、6・Ⅺ(7)、1973年から1974年では14・Ⅹ(8)、25・Ⅺ(52)、20・Ⅻ(21)、20・Ⅰ(31)、24・Ⅱ(49)、17・Ⅲ(38)、4・Ⅳ(34)、5・Ⅴ(5)、1974年から1975年では12・Ⅳ(1)、10・Ⅴ(6)、10・Ⅵ(34)、8・Ⅶ(11)、8・Ⅷ(30)、2・Ⅷ(45)、16・Ⅸ(18)、27・Ⅹ(10)、となっている。

こうした結果からみると、例年ひょうたん池に飛来するオシドリ・コガモの個体数の変動は、1960年頃はコガモがオシドリより多く、その比の逆転が1965年ころおこり、1970年ころに、またコガモが多くなっている。

両種の周期的な変動も記録上からは推察されるが、詳細については検討中である。

ひょうたん池における両種の生息状況は、北面に開く入園者との接触面に近くコガモが位置することが多く、オシドリは人間との接触を回避する傾向がある。

マガモ、カルガモは1970年まで稀の種であったが、1975年の時点ではマガモの雌雄1つがいと、カルガモの2～4羽が頻度高くみられるようになった。

とくに、カルガモについては、最高5羽を数えることもあり、時に姿を消すがつがいらしい2羽が一年中観察されるようになった。

(3) ワシタカ科 (ACCIPITRIDAE) 5種

5種中でとりあげるべきものは、ノスリとトビである。

トビは、自然教育園内を冬季寝ぐらとして利用しており、1960年12月から1961年12月の高野(1975)の記録では、6・Ⅺ(54), 13(70), 14(100), 25(110)・Ⅺ・1960; 6(140), 18(323), 19(401)・Ⅰ; 2・Ⅱ(274); 3(120), 4(80)・Ⅲ; 2・Ⅳ(13)・1961となり、9・Ⅸ(11); 25・Ⅹ(40); 15・Ⅺ・1961(398)と秋季より増加する。

しかし、1960~1961年ころが最大数で、1963年には170羽、1969年には50羽前後となり、現在もあまり変化がない。

例年9月中旬ころより集まりはじめ、1月に最高となる(1965~1966年も1月に最高)傾向を示し、3月下旬から4月上旬にかけ飛去する。

ノスリは、1965年まで9月から翌年6月まで1羽のみ水生の周辺で越冬していたが、その後みられなくなった。

稀に20・Ⅺ・1972などといった記録もあるが、まったく飛来しなくなったともいえる。

(1977・2に1羽を園内で保護し、回復後放鳥する)

他は上空を通過するのみ。

(4) ハヤブサ科 (FALCONIDAE) 2種

渡り時など移動時にみられるもので、とくに自然教育園との関連はない。

(5) キジ科 (PHASIANIDAE) 3種

コジュケイは周年生息し、繁殖もしている。

センサスの結果からは、年々記録される個体が減っている。23・Ⅸ(4), 21・Ⅺ(2)・1972; 14・Ⅱ(3), 20・Ⅲ(3), 23・Ⅳ(5), 17・Ⅵ(5), 15・Ⅶ(4), 20・Ⅺ(3)・1973; 25・Ⅳ(4), 6・Ⅵ(3)・1974; 27・Ⅴ(4)・1975などと、近年は4~5羽が記録に残るまでとなっている。

実数はこれ以上生息することが確実であるが、アオダイショウなどヘビの多いことが本種の減少に関与しているものと考えられる。

キジ(*Phasianus colchicus*)は、1949年当時の人によれば生息していたことが確実であるが1969年の時点では生息していない。

稀に飼育されていたものなどが侵入することがある。

(6) クイナ科 (RALLIDAE) 1種

放鳥したバン(1・Ⅹ・1964)があるのみで、放鳥後みつかっていない。

(7) シギ科 (SCOLOPACIDAE) 3種

イソシギは、水鳥の沼に飛来していたものであるが、1964年の高速道路工事による砂礫の小地域がなくなって以来、飛来しなくなった。14・Ⅳ・1973(1羽)が最近の記録である。

ヤマシギは未確認の情報も考りよすればイソシギよりも最近をよくみられており、湿地で4羽(26・Ⅸ・1964)をみたこともある。

タシギは、まったくの新しい記録で1羽しか観察できなかったことなど飛来の要因など不明である。

自然教育園は、一般的にシギ類の生息できるような環境がなく、わずかにヤマシギなどの移動時に立ちよれる湿地があるのみであることから、将来は、ヤマシギのみに希望がもてよう。

(8) カモメ科 (LARIDAE) 1種

稀に上空を通過するのを見る。自然教育園との直接の関連はない。

(9) ハト科 (COLUMBIDAE) 1種

キジバトは、近年個体数の増加がみられ、繁殖個体も多くなっている。

センサスの結果でもⅥ・1966で2～3羽しか記録されなかったが、Ⅵ・1969では5～8羽、Ⅵ・1973では8～12羽、Ⅵ・1974では10～12羽と記録個体数も多数となり、固定しつつある。

冬季では、Ⅻ・1966(12)、Ⅻ・1970(15)、Ⅻ・1972(19)、Ⅻ・1973(23)、Ⅻ・1974(15～20と安定)の個体数がみられている。

また、本種は、人を恐れなくなり、園路上で採餌中もドバト的なところがみられているが、まだ、地域的にちがいがあり、ドバトとの競合はみられていない。

(10) ホトトギス科 (CUCULIDAE) 3種

移動時に立ちよるもので、1～2日の滞留がみられるのみ。

中でもホトトギスの鳴き声をよく聞く。

(11) フクロウ科 (STRIGIDAE) 3種

アオバズクの確認は、夜間の鳴き声にたよる以外方法がなく、これまで調査もれのことが多かった。

1973年までは、夜間カエル調査で自然教育園内をまわる際に5月から10月まで、その鳴き声を確認していたが、1974年からは聞かれなくなった。

しかし、1975年には、時々聞く。

かつては、自然教育園内でも繁殖していたというが、最近では、移動の途中に1時的に立ち寄る程度と考えられる。

その他は稀に飛来。

(12) ヨタカ科 (CAPRIMULGIDAE) 1種

(13) アマツバメ科 (APODIDAE) 1種

いずれも稀で、自然教育園との関連性はうすい。

(14) カワセミ科 (ALCEDINIDAE) 1種

カワセミは、1961年の時点で周年ひょうたん池などで生息していたが、1964年の時点では、みられなくなっている。

これは、高速道路の工事にともなう影響と考えられる。12～24・Ⅸ・1964には、ひょうたん池でみているが、その後姿を消した。

将来の出現の望みはうすく、東京都のカワセミの退行からみても、おそくまで残っていた地域である。

(15) キツツキ科 (PICIDAE) 3種

中でもアカゲラが比較的頻度高く飛来する。

周年生息するのではなく、冬季の記録が多く、自然教育園の林の鳥としての関連性はうすい。

(16) ヒバリ科 (ALAUDIDAE) 1種

きわめて稀。

(17) ツバメ科 (HIRUNDIDAE) 1種

例年Ⅳ～Ⅸにみられるが、自然教育園内で繁殖しない。採餌に飛来し、湿地から水生、イモリの池、水鳥の沼にかけての沢ざいに飛翔する。

Ⅳ～Ⅸ・(1966); 15・Ⅳ～10・Ⅷ(1973); 6・Ⅳ～20・Ⅷ(1974)など、2～5羽の飛来がみられる。

飛翔性こん虫との間に関連性がある。

(18) セキレイ科 (MOTACILLIDAE) 4種

4種中でもキセキレイがとくに高い頻度でみられている。

自然教育園内での繁殖は未記録である。通常1～2羽で飛来し、事務所屋根などでみる。

この種も1964年頃より飛来も少なくなったもので、飛来しても滞留期間が短かく、1～2日である。

(19) サンショウクイ科 (CAMPEPHAGIDAE) 1種

渡り時に飛来する稀な種である。

(20) ヒヨドリ科 (PYCNONOTIDAE) 1種

以前は、例年10月から翌年5月まで滞留する冬鳥であったが、近年は周年みられるようになってきた。Ⅱ・1960～Ⅶ・1961；Ⅱ・1964～Ⅴ・1965；Ⅹ・1965～Ⅳ・1966；Ⅹ・1966～；Ⅹ・1969～Ⅴ・1970；周年・1972～1970～1971年の間から各月みられるようになったが、出現頻度は初期のころ低く、1975年頃は高くなった。

この原因は不明であるが、東京都内でも1965年以降平野部での繁殖がみられるようになり、最近では、都心での繁殖もみられるという（東京都：1969）。

(21) モズ科 (LANIIDAE) 2種

モズは例年繁殖が確認されているが、1つがいと考えられる。

夏季7～8月頃に一時姿を消すが、その時期以外は生息がみられる。

インセクタリアーム前のカラタチのとげや有刺鉄線などに、はやにえを秋季よくつくるのを見る。

生息地域は、食草園から事務所にかけての自然教育園南側の地域で、時に武蔵野でもみることがあるが、別個体かどうかは不明。

(22) レンジャク科 (BOMBYCILLIDAE) 1種

(23) ミソサザイ科 (TROGLODYTIDAE) 1種

キレンジャク、ミソサザイとも稀な種。

(24) ヒタキ科 (MUSCICAPIDAE)

。 ツグミ亜科 (TURDINAE) 10種

とくにとりあげるべき種は、ツグミ、アカハラ、シロハラである。

ツグミは、例年もっとも多く飛来し、越冬する。

アカハラ、シロハラは、例年飛来するがツグミに比較が少ない。

飛来時期はツグミが早く、飛去時期もツグミがおそい。

ツグミの飛来数をみると、8・Ⅱ・1970 (25羽+)；18・Ⅲ・1973 (42羽)；2・Ⅲ・1974 (21羽) と不安定ではあるが、例年センサスで20～40羽はかぞえられる。

1960年ころは、アカハラがシロハラより多くみられているが、1972年にはシロハラがアカハラより多くみられている。

これらのツグミ類は（中でもツグミ）、自然教育園に発生した長さ3mmほどの潜葉虫の幼虫を地上で捕食するようになり、異常な発生を抑える働きをしているものと考えられる。

。 ウグイス亜科 (SYLVIINAE) 7種

ウグイスが自然教育園には、もっとも関連が深い。しげみに生息するため目にふれにくいだが、例年12月から翌年の4月頃まで滞留し、冬を越す。

ⅩⅡ・1965～Ⅳ・1966；9・ⅩⅡ・1969～12・Ⅳ・1970など若干のちがいはある。時には、6・Ⅶ・1969の記録もあるが、カゴから逃げだしたのと考えられる。

オオヨシキリ・エゾムシクイ・センダイムシクイは、例年定期的に飛来するが滞留期間は短い。

1971年5月末に飛来したメボソムシクイは5日ばかり美しい鳴きを聞かせた。

。 ヒタキ亜科 (MUSCICAPINAE) 5種

いずれの種も長期間の滞留がみられない。

1965年頃は、キビタキ、コサメビタキ、エゾビタキがよくみられたが、その後は飛来数飛来頻度とも少ない。

㉔ カササギヒタキ亜科 (MONARCHINAE) 1種

渡り時の記録のみで、繁殖など、長期間滞留の記録はない。

㉕ エナガ科 (AEGITHALIDAE) 1種

稀である。

㉖ シジュウカラ科 (PARIDAE) 4種

シジュウカラが留鳥として周年生息し、繁殖している。

この種の繁殖個体数の変動については、1961年(37)、1962(36)、1963(33)、1967(25)、1968(25)、1969(23)、1970(23)、1971(22)と高速道路の完成とともに外圍の個体が減少するにともない、全体としても減少がみられ、逆に、1つがいあたりのテリトリーの広さが、0.8haから1.2haに広がっている(桜井他：1972)。

しかし、1976年の調査では、繁殖個体数が1961年の時点に回復しているように推察される(千羽：八木：未発表)。

ヤマガラは、1965年の時点で頻度高く出現していたが、その後減少し、あまりみられていない。多くは単独で飛来する。

他のカラ類は稀である。

㉗ メジロ科 (ZOSTEROPIDAE) 1種

メジロの繁殖記録はない。1965年当時は高速道路の工事などで、みることも少なかったが1972年頃より再び姿をみせることが多くなった。2～5羽前後の1群のことが多い。

㉘ ホオジロ科 (EMBERIZIDAE) 4種

ホオジロとアオジが、とくに注目される。

ホオジロは1～2つがいと思われ、1巣だけは確認している。武蔵野辺をなわばりの中心としており、時に水生、食草園地域でも繁殖期にみるが、あるいは別個体とも考えられる。

アオジは冬季飛来する長期間滞留の種であるが、個体数も比較的多く、自然教育園としては重要な種であろう。近年も飛来数は減っていない。

㉙ アトリ科 (FRINGILLIDAE) 6種

例年飛来するシメ、周年時々飛来するカワラヒワ以外は、稀にみる種である。

この2種も個体数が少なく、自然教育園の食物連鎖のうえからは重要度が低いと考えられる。

シメの飛来数は、1975年ころより減少し、カワラヒワは逆に増加している。

㉚ ハタオリドリ科 (PLOCEIDAE) 1種

スズメは自然教育園内での繁殖はみられないが、都市化された周辺の家屋で営巣、繁殖するものが、採餌などのために飛来するものである。

1965年当時は、園の外圍地域にしか生息していなかったが、1970年ころからは、中央部にまで侵入するようになっていく。

自然教育園周辺の都市化が、都市型鳥類の侵入、増加をもたらす原因となっている。

㉛ ムクドリ科 (STURNIDAE) 2種

かつては、ムクドリの大群(300羽)がやってきていたが、1974年頃から急激に減少してきた。

この原因は、周辺の都市化にともなう営巣地や採食地の減少が考えられる。

本来ムクドリが自然教育園を利用する形態は、採餌と休息のために寝ぐらには使っていない。また繁殖地としても利用していない。

したがって、周辺地域で繁殖したものが飛来していたもので、自然教育園がムクドリの生息に不相当となつたのではなく、むしろ、外圍環境の変化がムクドリの減少をもたらしたものと考えられる。

③ カラス科 (CORVIDA) 4種

カケスを除くオナガ、ハシブトガラス、ハシボソガラスは、都市的環境に強い代表的なものである。

いずれも、1970～1971年頃より増加の傾向をみせている。

ハシブトガラスは、自然教育園を寝ぐらとして利用しており、1974年にも500羽以上が確認されている。

オナガは、日行動の中の一地域として飛来するもので、生活の本拠とはしていない。

繁殖は、1965年当時に営巣跡を発見したが現在確認がない。また、1967年の冬季に小鳥の森内で寝ぐらを発見したが、現在はみられていない。

カケスは、かつて例年冬季に飛来していたが、近年は稀である。

ハシブトガラスの増加は、自然教育園内で生息する他の鳥類にとっては、かなりのマイナス要因となっている。

コサギ、ホオジロをはじめとして、数羽のハシブトガラスに追跡されている現場をしばしば目撃きもするし、コサギのように明らかにカラスによるものと考えられる斃死体を拾得したこともある。

これらは、今後の自然教育園の鳥類群集の保護について考える場合、無視できない問題であろう。

これまで科単位に考察してきたが、総合的な検討は、経緯の項で概略を記してあり、それぞれの報告書でのべられているとおりである。

4. ま と め

この報告には、自然教育園における鳥類群集調査の経緯を、発表、未発表のものを含めてとりあげ、その概要を示すとともに、現在に至る流れを記した。

この地域は、1949年に一般公開されるまで特殊な管理形態にあったため、鳥類のみでなく、生物群集に関しての資料が、きわめて少ないという難点がある。

しかし、公開後は、徐々にではあるが資料の収集がなされ、とくに、1960～1961年の高野による調査が自然教育園の鳥類についての実態を明らかにした。

現在は、13目、33科、98種及亜種をリストとして報告することとなったが、ここに至るまでには、多くの変動がみられた。

1964～1965年の高速道路の建設は、約3,000坪の自然林を削り、生息地の減少をもたらした。

その結果としてシジュウカラ繁殖個体にいちぢるしい変動が現われた(桜井他:1972)。

また、周辺環境の変化は、自然教育園にも影響をおよぼしはじめ、鳥類群集の単純化傾向をみいだすこととなった(千羽:1966)。

そして、単純化にともなう特徴としては、都市的鳥類といわれるカラス、オナガ、キジバト、スズメなどの個体数の増加がみられ、また、ドバトなど、家禽の目げきが増加していることである(千羽:1972)。

個々の鳥類では、オシドリとコガモの個体数の年変動が10年の周期をみせていること、ヒヨドリの出現頻度をみると、1970年頃から周年生息する傾向がではじめたことなどを知った。

また、出現しなくなった種としては、ノスリ(1966年以降)、イソシギ(1965年以降)、カワセミ(1964年

以降)などがある。

これらのことについては、1972年から1975年までの出現度頻、優占度の表を示したので詳細を省いた。

いずれにしても、自然教育園における鳥類群集は、都市環境の中での生存を強いられているため、種組成の単純化をまぬがれず、徐々に都市型鳥類の占める場所となっている。

しかし、20ヘクタールの自然林の存在は、いまだに、八王子市高尾山麓と同じ鳥類相を示しているように資料が物語っていることを記しておきたい。

参 考 文 献

- 1) 千羽晋示(1969)：自然教育園の鳥類群集について 自然教育園報告 No.：1～13
- 2) 千羽晋示(1972)：環境変化と鳥類群集 都市生態系の特性：33～37
- 3) 千羽晋示(1974)：環境変化と動物群集 同報告：27～46
- 4) 千羽晋示(1973)：動物の生息環境の変化と退行現象 自然科学と博物館 40(2)：69～73
- 5) 千羽晋示(1975)：都市化された地域の鳥類・哺乳類調査 都市生態系の構造と動態 1974：111～128
- 6) 千羽晋示(1976)：鳥類群集の変動について 同 1975年度報告：177～190
- 7) Chiba S. (1974)：Environmental transitions and community of animals Studies in Urban Ecosystem 1973：46～64
- 8) Chiba S. (1974)：Indices of Urban environments in relation to aves and animals Studies in Urban Ecosystem 1973：65～72
- 9) 科学技術庁資源調査所(1971)：自然教育園生物相15年間の比較 都市環境保全 第23号
- 10) 黒田長礼監修(1954)：A List of Animals in the National Garden for Nature Study, Series 2 nd Aves (Preliminary Report) (ガリ版)
- 11) 文部省科学教育局(1949)：国立自然教育園概説：42pp.
- 12) 文部省国立自然教育園(1954)：国立自然教育園動物目録第2集 鳥綱 国立自然教育園基礎資料 第2号：4pp
- 13) 中西悟堂(1949)：自然教育園の鳥目録 野鳥14(5)：24
- 14) 中西悟堂監修(1950)：国立自然教育園の野鳥 春夏の鳥の部 冬の鳥の部 国立自然教育園(ガリ版)
- 15) 中西悟堂(1951)：自然教育園の鳥目録 野鳥16(3)：24～25
- 16) 日本野鳥の会：野鳥の観察記録の報告 野鳥各号より
- 17) 同会東京支部：支部報の観察記録の報告 東京支部報各号より
- 18) 日本鳥学会(1974)：日本鳥類目録第5版 学習研究社
- 19) 桜井信夫他(1972)：自然教育園におけるシジュウカラの繁殖個体数の変動について(中間報告) 自然教育園報告 第3号：17～21
- 20) 桜井信夫(1972)：東京都23区内の2・3の緑地における繁殖鳥類の年変化について 都市生態系の特性に関する基礎的研究 1971年度報告：83～96
- 21) 桜井信夫(1974)：東京都心部におけるシジュウカラの繁殖状況と森林植生の関係について 同報告 1973年度報告：129～136
- 22) 桜井信夫(1973)：東京の鳥のはなし 自然科学と博物館40(2)：65～68
- 23) 桜井信夫(1973)：東京23区内におけるシジュウカラの繁殖状況について 同 1972：123～138
- 24) Sakurai N. (1973)：Varieties of birds that breed in the heart of Tokyo metropolis and breed-

- ing condition of Japanese Great Tit Studies in Urban Ecosystem 1972 Report : 29~40
- 25) 鶴田総一郎 (1954) : 国立自然教育園の開設 鳥13 : 72~77
- 26) 鶴田総一郎他 (1966) : 自然教育園の鳥類について 自然教育園の生物群集に関する調査報告 第一集 財団法人野外自然博物館後援会 : 80~93
- 27) 高野伸二 (1965) : 自然教育園の鳥類センサス資料 (未発表)
- 28) 末友康允 (—) : 国立自然教育園の鳥 テクラ6 麻布学園生物部

Summary

A note on the Avi-fauna of the National Park for Nature Study.

Old records on the Avi-fauna of the National Park for Nature Study are very scarce, because the area of the Park had been maintained under peculiar form of management.

Probably the first of existing comprehensive reports might have been the record of observation taken by Godo Nakanishi on March 29, 1949.

However, full-scale Check-list of Birds has been that which was completed as No.2 Collection of National Park for Nature Study Resource Materials in 1954. Nevertheless, the conclusive completion was the resource materials gathered by Shinji Takano from 1964—1965.

Check-list of Birds brought to completion by Soichiro Tsuruta in 1966 enumerates 32 families and 96 species.

However, some parts of its reports still required further examinations. This time, such aspects were re-considered, supplemented and revised.

As its results, we found that birds observed in the National Park for Nature Study were 33 families, 98 species and sub-species. And, in addition, six species of pet birds fled from the owners were noticed.

Such survey, besides Check-list of birds, was prompted by the project of Studies of Urban Ecosystem and considerations were added from various angles.

Shinli Chiba (1969) indicated comparatively plentiful avi-fauna aspect, and he reported the increase of strong species well combined with areas of human activities, such as Tree-Sparrow, and Jungle-Crow.

Nobuo Sakurai (1972) reported sudden decrease of breeding individuals of Great Tit along the Highways and due to construction of High storied buildings.

By the way, S. Chiba (1972) pointed out that worsening of living environments prompted simplification of varieties in formation. And N. Sakurai reported (1973 & 1974) the co-relations between Great Tit and forest Vegetation.

Such reports scrutinized precious value of the green spot remaining just like a solitary islet in the midst of a great city.

Records from 1972 to 1975 were indicated as a table on occurrence and dominant value of Avi-fauna.

As you see therein, bird communities in the National Park for Nature Study showed remarkable changes during the last several years.

Conspicuous changes in surrounding circumstances, brought about simplification of bird communities. Urbanized birds alone manifested increase in the number of individuals.

Crows, Sparrows, Magpies, Turtle-doves, etc. are such typical examples.

As to respective species, flying visits by Little-Egrets became oftener. Increase and decrease of flying visits by Mandarin Duck and Teals are happening with a cycle of 10 years.

Moreover, Brown Hawk Owl, Buzzard, Jays, etc. stopped flying visits since 1963. On the contrary, Brown-eared Bulbuls became abiding birds, as we see all the year round.

In addition, House-pigeons and some other pet birds remind us in connection with their frequent appearance, of the prevailing significant consequences of urbanization in the environments of the National Park for Nature Study.

種名		昭和48年度 自然教育園鳥類群集調査 集計表 —鳥相内優占度—													年平均	その他	
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月				
1	コイサギ		0.3			0.4	0.2	0.2	0.4	0.8						0.15	
2	コサギ		0.3	0.3	0.3					0.2			0.1			0.10	
3	オシドリ	5.1	6.8	3.9	0.8					1.8	15.9	9.5	11.6	4.62			
4	マガモ																
5	カルガモ		0.7	0.6	0.4	0.5	0.7			0.2	0.3	0.4	2.3	0.51			
6	コガモ	28.4	23.7	12.5	13.3	3.1					3.8	15.8	8.5	9.09			
7	トビ	9.7	2.2					0.03						0.2	1.02		
8	コジュケイ	0.6	0.6	0.5	0.7	1.3	1.7	0.7	0.3	0.8	1.2	0.1	0.8	0.78			
9	キジバド	5.7	8.9	6.4	3.0	3.3	2.3	1.6	1.2	6.9	4.0	7.2	6.4	4.74			
10	カッコウ																
11	ホトトギス						0.1									0.01	
12	ツバメ				0.2	0.8	0.1	0.2	0.2							0.13	
13	キセキレイ									0.2	0.6	0.1		0.08			
14	サンショウクイ					0.1								0.01			
15	ヒヨドリ	13.7	18.7	27.6	28.0	1.3	0.6	0.4	1.9	17.1	40.8	39.8	30.4	18.36			
16	モズ		0.1	0.4	0.2	0.1	0.2	0.2		1.0	0.9	0.7	1.1	0.26			
17	ルリビタキ																
18	ジョウビタキ																
19	アカハラ	0.3			1.1	1.6							0.3	0.28			
20	シロハラ	0.3	0.1		0.1									0.3	0.07		
21	ツグミ	2.6	3.3	6.9	3.4	0.2						0.9	3.9	1.77			
22	ウグイス	1.4	2.1	2.7	6.9	0.1						2.1	2.0	1.44			
23	オオヨシキリ					0.1										0.01	
24	メボソムシクイ					0.1	0.4		0.1							0.05	
25	センダイムシクイ				0.2	0.1			.1							0.03	
26	キビタキ				0.03						0.3					0.03	
27	オオルリ				0.03											0.01	
28	サメビタキ																
29	コサメビタキ																
30	サンコウチョウ					0.1				0.2						0.03	
31	ヤマガラ																
32	シジュウカラ	6.9	9.3	10.8	9.9	18.1	18.0	4.8	7.4	18.7	11.6	7.5	4.9	10.66			
33	メジロ	1.4	0.4	0.4	0.9	0.4	1.5	0.6	0.4	1.4	3.5	1.5	1.6	1.17			
34	ホオジロ	0.6	1.0	0.9	1.3	0.8	1.0	0.6	0.3	0.4		0.7	0.3	0.66			
35	カシラダカ			0.2	0.1						0.3	0.2		0.07			
36	アオジ	4.2	4.6	2.6	3.5	1.0					0.3	3.2	5.6	2.08			
37	カワラヒワ		0.1	0.3	0.5	0.8	1.0	0.1	0.3	1.4	0.3			0.40			
38	イカル				0.1											0.01	
39	シメ	1.2	1.8	0.9	1.1							0.4	2.0	0.62			
40	スズメ	4.2	2.5	3.0	16.3	50.1	43.1	35.8	31.5	28.5	1.4	0.8	2.0	18.27			
41	ムクドリ		0.6	0.6	1.0	0.3	6.3	48.4	49.8	3.0	1.2	0.2	1.8	9.43			
42	カケス																
43	オナガ	2.6	2.4	3.4	2.8	1.3	0.7	0.1	0.7	4.3	2.9	0.5	1.0	1.89			
44	ハシボソガラス	0.5	0.1	0.3	0.1						0.3	0.1		0.12			
45	ハシブトガラス	10.1	8.9	14.0	8.8	13.7	21.5	6.2	5.3	11.2	9.5	6.2	9.0	10.37			
46	アカモズ			0.5	0.1											0.05	
47	ゴジュウカラ			0.1												0.01	
48	ウソ				0.03											0.01	
49	コムクドリ				0.03	0.1										0.01	
50	エゾムシクイ					0.1										0.01	
51	エゾビタキ					0.1	0.1									0.02	
52	ダイサギ					0.1										0.01	
53	ルリサンジャク									1.2						0.10	
54	キュウカンチョウ									0.4						0.03	
55	ドバト										0.3					0.03	
56		0.5	0.6		0.8	0.1	0.4	0.3			0.9	1.8	3.9	0.78			
種類数		20	24	24	33	30	19	16	15	20	21	25	22	51			
備考									ヘキチョウ 0.1					トラツグミ 0.1 クロジ 0.1			

種 名		昭和49年度 自然教育園鳥類群集調査 集計表 —鳥相内優占度—													年平均	その他
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月			
1	コイサギ		0.1		0.1	0.1	0.1	0.5	0.2		1.0	0.2		0.19		
2	コサギ	0.6	0.5	0.8	0.6	0.3	0.4		1.4	2.0	0.2	0.2	0.4	0.62		
3	オシドリ	9.9	7.6	14.2	4.2	0.6				5.1	14.9	10.2	10.6	6.44		
4	マガモ		0.6	1.2	0.2							0.5		0.21		
5	カルガモ	3.1	3.8	1.1	1.0	1.0	0.2	0.2		0.9		1.8	3.4	1.38		
6	コガモ	18.3	25.7	22.1	10.4	2.4				0.9	4.4	15.8	7.2	8.93		
7	トビ	0.1	0.1											0.02		
8	コジュケイ	0.9	0.5	0.6	0.8	1.2	1.4	1.8	0.8	0.9	0.6		0.4	0.83		
9	キジバト	7.9	6.3	3.3	5.0	4.2	4.8	2.1	6.6	13.1	8.7	7.4	8.3	6.48		
10	カッコウ					0.1								0.01		
11	ホトトギス					0.1								0.01		
12	ツバメ				0.8	0.7	0.1	0.2	0.2					0.17		
13	キセキレイ				0.1							0.6	0.4	0.09		
14	サンショウクイ															
15	ヒヨドリ	18.2	17.0	20.0	21.7	2.0	1.0	1.4	3.8	4.3	24.0	39.7	23.7	14.71		
16	モズ	0.4	0.1							0.3	1.2	0.5	0.8	0.28		
17	ルリビタキ	0.1												0.01		
18	ジョウビタキ										0.2			0.02		
19	アカハラ	0.6	0.3	0.2	0.5	1.2							0.7	0.4	0.33	
20	シロハラ		0.3	0.2	0.5								0.4	0.2	0.13	
21	ツグミ	4.8	4.3	7.0	3.1	0.6					0.2	6.5	15.5	3.50		
22	ウグイス	1.7	1.2	1.3	0.9	0.3						0.4	0.9	0.56		
23	オオヨシキリ					0.1								0.01		
24	メボソムシクイ					0.2	0.1							0.03		
25	センダイムシクイ				0.2	0.3								0.04		
26	キビタキ															
27	オオルリ				0.1	0.3					0.4			0.07		
28	サメビタキ															
29	コサメビタキ															
30	サンコウチョウ															
31	ヤマガラ						0.1							0.01		
32	シジュウカラ	10.2	10.2	10.9	13.4	12.4	12.8	11.4	11.1	25.4	11.5	4.1	5.7	11.59		
33	メジロ	1.4	0.2	1.1	1.4			0.2	0.9	0.3	1.0	0.2	0.2	0.58		
34	ホオジロ	0.4	0.3	0.5	0.7	1.4	0.6	0.8	0.7	0.3	0.8	0.9	0.8	0.68		
35	カシラダカ													0.8	0.07	
36	アオジ	3.8	3.4	3.1	1.8	0.3					1.0	1.6	2.3	1.44		
37	カワラヒワ		0.9	0.2	1.5	1.3	0.8	0.3	0.3	0.6	0.6	0.2	0.8	1.30		
38	イカル															
39	シメメ	1.0	0.6	0.5	0.1							1.8	4.2	0.68		
40	スズメ	3.3	2.8	7.5	16.1	50.6	40.4	41.2	47.8	23.1	3.6	0.2	0.9	19.79		
41	ムクドリ	0.9	0.1	0.5	0.1	0.4	21.8	30.1	11.2	11.4	11.5	0.2	0.8	7.42		
42	カケス									0.9	1.8	0.7	0.2	0.30		
43	オナガ	1.2	2.9	0.6	3.0	0.1	0.1	0.2	0.1	0.9	1.8	1.4	3.4	1.31		
44	ハシボソカラス	0.6	0.4	0.1	8.7									0.09		
45	ハシブトガラス	10.2	8.8	7.8	8.7	16.7	14.5	7.9	14.6	9.1	9.5	3.8	7.8	9.95		
46	アカモズ		0.2											0.02		
47	ゴジュウカラ				0.1			0.2		0.3				0.05		
48	ウソ				0.1									0.01		
49	コムクドリ				0.1									0.01		
50	エゾムシクイ				0.1									0.01		
51	エゾビタキ				0.1									0.01		
52	ダイサギ					0.1								0.01		
53	ルリサンジャク					0.4								0.03		
54	キユウカンチョウ								0.1					0.01		
55	ドバト									0.3				0.03		
56		0.4	0.9	0.2	1.0	0.3	0.1		0.1	0.3			0.2	0.29		
種 類 数		24	28	24	33	29	17	15	16	20	24	27	27	54		
備 考 (平均個体数)		115.3	143.3	123.2	255.8	86.9	76.9	103.5	64.5	43.8	82.7	139.3	105.6			
											エゾビタキ ダイサギ 0.2	ダイサギ チュウサギ 0.2	ダイサギ イソコ 0.2			

種名		昭和48年度 自然教育園鳥類群集調査 集計表 —出現頻度—													
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均	その他
1	コイサギ					33.3	13.3	20.0	33.3	33.3				41.7	
2	コサギ		25.0	57.1	31.8				16.7			20.0		41.7	
3	オシドリ	100.0	100.0	100.0	36.4					50.0	100.0	100.0	100.0	66.7	
4	マガモ														
5	カルガモ		50.0	57.1	31.8	27.8	26.7			16.7	25.0	20.0	100.0	75.0	
6	コガモ	100.0	100.0	100.0	100.0	27.8					75.0	100.0	100.0	75.0	
7	トビ	75.0	75.0					5.0					25.0	33.3	
8	コジュケイ	50.0	75.0	57.1	68.2	83.3	53.3	65.0	27.8	50.0	50.0	20.0	50.0	100.0	
9	キジバト	100.0	100.0	100.1	86.4	94.4	73.3	90.0	72.8	83.3	100.0	100.0	100.0	100.0	
10	カッコウ														
11	ホトトギス						6.7							8.3	
12	ツバメ				18.2	38.9	6.7	15.0	11.1					41.7	
13	キセキレイ									16.7	50.0	20.0		25.0	
14	サンショウクイ					5.6								8.3	
15	ヒヨドリ	100.0	100.0	100.0	100.0	61.1	40.0	40.0	77.8	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
16	モズ		25.0	42.9	27.3	11.1	13.3	20.0		66.7	75.0	80.0	100.0	83.3	
17	ルリビタキ														
18	ジョウビタキ														
19	アカハラ	25.0			72.7	27.8							50.0	33.3	
20	シロハラ	25.0	25.0		9.1								25.0	33.3	
21	ツグミ	100.0	100.0	100.0	90.9	11.1						100.0	100.0	58.3	
22	ウグイス	100.0	100.0	100.0	59.1	5.6						100.0	100.0	58.3	
23	オオヨシキリ					5.6								8.3	
24	メボソムシクイ					11.1	20.0		11.1					25.0	
25	センダイムシクイ				22.7	11.1								16.7	
26	キビタキ				4.5						25.0			16.7	
27	オオルリ				4.5									8.3	
28	サメビタキ														
29	コサメビタキ														
30	サンコウチョウ					5.6				16.7				16.7	
31	ヤマガラ														
32	シジュウカラ	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
33	メジロ	75.0	25.0	57.1	63.6	33.3	66.7	70.0	33.3	50.0	50.0	80.0	75.0	100.0	
34	ホオジロ	50.0	100.0	85.7	90.9	66.7	73.3	70.0	33.3	33.3		80.0	50.0	91.7	
35	カシラダカ			28.6	9.1						25.0	20.0		33.3	
36	アオジ	100.0	100.0	100.0	100.0	22.2					25.0	100.0	100.0	66.7	
37	カワラヒワ		25.0	42.9	45.5	55.6	46.7	15.0	33.3	66.7	25.0			75.0	
38	イカル				9.1									8.3	
39	シメ	100.0	75.0	71.4	90.9							60.0	100.0	50.0	
40	スズメ	75.0	75.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	50.0	60.0	75.0	100.0	
41	ムクドリ		25.0	57.1	59.1	22.2	93.3	95.0	100.0	66.7	50.0	40.0	100.0	91.7	
42	カケス														
43	オナガ	100.0	100.0	100.0	81.8	54.5	40.0	10.0	55.6	100.0	75.0	80.0	100.0	100.0	
44	ハシボソカラス	50.0	25.0	42.9	4.5						25.0	20.0		50.0	
45	ハシブトカラス	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	90.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
46	アカモズ			14.3	9.1									16.7	
47	ゴジュウカラ			14.3										8.3	
48	ウソ				4.5									8.3	
49	コムクドリ				4.5	5.6								16.7	
50	エゾムシクイ					5.6								8.3	
51	エゾビタキ					5.6	6.7							8.3	
52	ダイサギ					5.6								8.3	
53	ルリサンジャク									33.3				8.3	
54	キュウカンチョウ									16.7				8.3	
55	ドバト										25.0			8.3	
56		25.0	25.0		18.2	11.1	20.0	25.0			25.0	60.0	100.0	75.0	
種類数		20	24	24	33	30	19	16	15	20	21	25	22	51	
備考									ヘキチョウ 11.1			ヒラツグミ クロジ 20.0			

種 名		昭和49年度 自然教育園鳥類群集調査 集計表 ——出現頻度——													
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均	その他
1	コイサギ		12.5		7.1	12.5	7.7	16.7	14.3		16.7	25.0		66.7	
2	コサギ	42.9	50.0	44.4	50.0	25.0	30.8		64.3	62.5	16.7	25.0	40.0	91.7	
3	オシドリ	100.0	100.0	88.9	71.4	50.0				37.5	100.0	100.0	80.0	75.0	
4	マガモ		37.5	66.7	14.3							25.0		33.3	
5	カルガモ	100.0	87.5	44.4	50.0	50.0	7.7	16.7		12.5		50.0	40.0	83.3	
6	コガモ	100.0	100.0	100.0	100.0	50.0				25.0	83.3	100.0	80.0	75.0	
7	トビ	14.3	12.5											16.7	
8	コジュケイ	42.9	37.5	66.7	57.1	75.0	69.2	100.0	50.0	12.5	33.3		40.0	91.7	
9	キジバド	100.0	100.0	100.0	92.9	100.0	92.3	100.0	85.7	87.5	100.0	100.0	100.0	100.0	
10	カッコウ					12.5								8.3	
11	ホトトギス					12.5								8.3	
12	ツバメ				35.7	50.0	7.7	16.7	14.3					41.7	
13	キセキレイ				7.1							33.3	50.0	25.0	
14	サンショウクイ														
15	ヒヨドリ	100.0	100.0	100.0	92.9	87.5	69.2	83.3	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
16	モズ	42.9	12.5							12.5	83.3	75.0	80.0	50.0	
17	ルリビタキ	14.3												8.3	
18	ジョウビタキ										16.7			8.3	
19	アカハラ	57.1	37.5	22.2	28.6	50.0						75.0	40.0	58.3	
20	シロハラ		57.5	22.2	28.6							25.0	20.0	41.7	
21	ツグミ	100.0	100.0	88.9	100.0	37.5					16.7	100.0	100.0	66.7	
22	ウグイス	100.0	100.0	66.7	57.1	25.0						50.0	80.0	58.3	
23	オオヨシキリ					12.5								8.3	
24	メボソムシクイ					12.5	7.7							16.7	
25	センダイムシクイ				21.4	25.0								16.7	
26	キビタキ														
27	オオルリ				7.1	25.0								25.0	
28	サメビタキ										33.3				
29	コサメビタキ														
30	サンコウチョウ														
31	ヤマガラ						30.8							8.3	
32	シジュウカラ	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
33	メジロ	57.1	25.0	55.6	64.3			16.7	21.4	12.5	50.0	25.0	20.0	83.3	
34	ホオジロ	28.6	37.5	44.4	50.0	87.5	46.2	83.3	35.7	12.5	50.0	75.0	80.0	100.0	
35	カシラダカ												20.0	8.3	
36	アオジ	100.0	100.0	100.0	100.0	25.0					16.7	100.0	80.0	66.7	
37	カワラヒワ		50.0	22.2	64.3	75.0	53.8	33.3	21.4	25.0	33.3	25.0	60.0	91.7	
38	イカル														
39	シメ	85.7	62.5	66.7	7.1							75.0	80.0	50.0	
40	スズメ	85.7	87.5	66.7	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	83.3	25.0	20.0	100.0	
41	ムクドリ	57.1	12.5	33.3	14.3	37.0	61.5	100.0	57.1	50.0	66.7	25.0	40.0	100.0	
42	カケス									12.5	66.7	75.0	20.0	33.3	
43	オナガ	100.0	62.5	66.7	85.7	12.5	7.7	16.7	7.1	25.0	83.3	75.0	60.0	100.0	
44	ハシボソガラス	57.1	25.0	11.1											
45	ハシブトガラス	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
46	アカモズ		25.0											8.3	
47	ゴジュウカラ				7.1			16.7		12.5				25.0	
48	ウソ				7.1									8.3	
49	コムクドリ				7.1									8.3	
50	エゾムシクイ				7.1									8.3	
51	エゾビタキ				7.1									8.3	
52	ダイサギ					12.5								8.3	
53	ルリサンジャク					25.0								8.3	
54	キュウカンチョウ								7.1					8.3	
55	ドバト									12.5				8.3	
56		28.6	62.5	11.1	7.1	12.5	7.7		7.1	12.5			20.0	75.0	
種 類 数															
備 考											エ/ビタキ ダイサギ 16.7	ダイサギ キュウサギ 25.0	ダイサギ インコ 20.0	ダイサギ 25.0	

